

な
『
橘
先生
は二
人が
応援
して
いる
チー
ムが
早々

『勝
ち抜
いて
たら
元日
には
決勝
だっ
たの
に

「あ
ー、
今の
ところ
未定
です」

「また
いき
なり
前置
きな
しに
本題
に入る
。」

『年
末年
始の
予定
は？』

先
生か
らだ
った
。」

ケ
ット
に入
れて
おい
た携
帯電
話が
鳴っ
た。
橘

と
つて
も、
それ
は嬉
しい
こと
だっ
た。
。

彩
菜も
楽に
なる
かも
しれ
ない
。

手
な人
だっ
たよ
うだ
から
、こ
れか
らは
少し
は

は
今ま
で彩
菜一
人に
残業
を押し
付けて
きた
勝

を募
集す
ること
になる
だろ
うと
。辞
める
女性

彩
菜は
言っ
てい
た。
会
社は
きつ
と新
しい
社員

性
が且
那さ
んの
転勤
で辞
める
こと
にな
った
と

会
社で
彩菜
と同
じ仕
事を
して
いた
事務
の女

そ
うい
え
ば：
：、
と裕
弥は
思っ
た。
。

に負けてしまったサッカーの大会について言
った。勝ち進んでいれば元日は決勝だったの
だ。
「そうですね。元日の予定を空けておいたの
に」
橘先生が笑った。ような気配がした。
「来年こそ……いやまだ年末だから、再来
年こそ元日にスタジアムにしよう」
「はい」
「と」
橘先生はちよつと間をあけてから、
「もしも予定が空いてるようなら、うちに遊
びに来ないか」
「え？」
「僕の実家の両親は海外にいるから、僕はこ
こでお正月を過ごすのだが」
「おせち料理も用意するから」
裕弥は自分の家庭の事情を話したことはな
かったが、橘先生は勘がいい人なのでなんと

「ど、お久しぶりです」
ポーンポーンと玄関に投げた靴を片方ずつ
「あゝ」
「た。義母だった。つまり、父親の再婚相手だっ
げた。」「
「あ、すみません、どなたですか？」
「あ、裕弥は戸惑いながら、
「わたし、です」
「わたし、です」
人に覚えがなかった。
ろうと思っただけ。それにこういう呼び方を
聞き覚えのない女性の声だったので、誰だ
「はい、そうですけど」
「裕弥：さん？」
「もしもし」
れてしまいいそうな電話の受話器をとる。

とを何も考えていない様子だから、わたし、
ない？ あの人があんまりにもこれから、
のよ。亭主元気で留守がいい、って言うじゃ
やっぱりね、ずっと二人で家にいると疲れる
生活費がどうこうっていう話ではなくって、
よ。働いてくれなくちゃ困るの。あ、すぐに
近は毎日家にいるの。まだ五十代前半でし
てリストラされたのかもしれない。それで最
分から辞めたって言うけど、もしかし
「あの人ったら、会社を辞めちゃったの。自
た。きた理由は自分と裕弥の父親とのことだっ
ついでなどは何も聞かなかった。電話をして
義母は久しぶりに話す裕弥の最近の様子に
は当然ともいえる。た。声を聞いても義母だとわからなかつたの
元々ほとんど会話を交わしたことはない、
と話すのは久しぶりだった。というより、
実家に長い間帰ってなかった裕弥は、義母

これからどうするつもりなのか、働くつもり
はないのか。聞いたの。そしたら出
あの人、うるさがって。「文句があるなら出
て行け”って、ひどいと思わない？”
途切れることなく甲高い声で話し続ける義
母の言葉は、裕弥が知らない遠い世界から聞
こえてくるようだった。
『ね、裕弥さん、どう思う？ あの人はどう
働く気がないのかしら？』
「前の仕事辞めたばかりだから、少し休もう
と思っっているだけじゃないですか？」
『そんな、ヒトゴトみたいなのにノンキなこと言
つて』
が、義母は裕弥の言葉にカチンときたようだ
った。
『こんなこと相談できるの、裕弥さんしかい
ないと思っただけ電話したの。ねえ、裕弥さん
からあの人に働くように言っただけよ』

「俺が……ですか」
『そうよ。わたしたち、家族じゃない』
“家族”という言葉がこんなに空々しい響き
を持つているというのを、裕弥は初めて知
った。
『とにかく裕弥さん、うちに来てね。あの
人と話して。あの人が、わたしとは口もきかなく
なっちゃって』
言いたいことだけ言って、義母は電話をき
った。
裕弥は深いため息をつきながら受話器を置
いた。義母は「うちに来てね」と言った。
「帰ってきてね」ではなく。その表現だけで
裕弥はもう既にその家の人間じゃないという
ことだと思えた。
でも、まあ、親父にも全然会ってないし。
いい機会かもしれない。
裕弥は重たいのか楽しみなのか自分でもわ
からない感情に満たされながら、義母の誘い
のつて久しぶりに実家に行ってみることに

とこの人、なにかな勘違いしてるんじゃないか。と裕弥は思いながら、義母が勧めるままにた。んだ。女を感じさせるような媚びた笑顔だった。何もこたえない裕弥の顔を見て義母は微笑。「裕弥さん、この香り好き？」。「そうですね、あの人が好き。な香りなの。」。「この香水はね、あの線から逃れようと関心をそらすような質問をした。」。「あら。」義母は頬を染めた。「香水つけてます？」。「懐かしさは息苦しさと共に気持ちになっただけ。懐かしさは息苦しさと共にの匂いがした時、時間がさかのぼったような気がした。」。「懐かしさは息苦しさと共にはわからなかったが、義母がつけている香水はないので、義母が変わったのかどうか裕弥に

様子だっ。なんて声をかけていいのかわか
義母に呼ばれ、現れた父親は不機嫌そう
だと思っ。この家とって“お客さん”なの
く、自分はこの家とって“お客さん”なの
なかつた。裕弥は実家に帰ってきたのはな
て、まるで見知らぬ家にいるように落ちか
部屋の装飾は裕弥の記憶とは変わって
待っていた。感じながら、席に座って父
奇妙な緊張を感じながら、席に座って父
「あの、呼んでくるわね」
ように勧めた。
義母はテーブルの席のひとつを裕弥に座
もの作れなくて
「ごめんなさい、大晦日で慌しくてた
皿が3つ置かれていた。
テーブルの上には、ちらし寿司を盛ったお
食卓がある部屋に入っ。いっ

は 失 敗 だ っ た か な と も 思 っ て い た 。 裕 弥 は ど
に な る と は 予 想 し て い な か っ た の で 、 来 た の
弥 は 、 父 親 と 再 会 し て こ ん な 気 詰 ま り な 状 態
ら ち よ つ と し ん み り と し た 。 そ れ に し て も 裕
言 で は な か っ た の で 、 ち ら し 寿 司 を 食 べ な が
裕 弥 は 義 母 の 料 理 で 育 っ て き た と い っ て も 過
ば 救 い だ っ た 。 ま あ 、 そ れ が 救 い と い え
は 義 母 だ け だ っ た 。 ま あ 、 そ れ が 救 い と い え
気 詰 ま り な 雰 囲 気 の 中 で 、 浮 か れ た 様 子 な の
父 親 は 一 切 、 裕 弥 を 見 よ う と し な か っ た 。
義 母 が 言 っ て 、 三 人 は 食 事 を 始 め た 。
「 さ 、 い た だ き ま し ょ う か 」
も 気 に な っ て し ま う 。
裕 弥 は 父 親 か ら 目 を そ ら し た 。 で も ど う し て
ま り じ ろ じ ろ 見 る の も 悪 い よ う な 気 が し て 、
父 親 を 見 て 、 白 髪 が 増 え た な 、 と 思 っ た 。 あ
義 母 と 並 ん で 裕 弥 と 向 か い 合 う 席 に 座 っ た
い た が 、 父 親 は 裕 弥 を 見 な か っ た 。
ら ず 目 が 合 っ た ら 頭 で も 下 げ よ う か と 思 っ て

こかで期待していた。再会した父親とよい親
子関係が築きなおせることを。
「裕弥さんは、お仕事、なにをやってる
の？」
義母が訊いた。仕事の話になったので、父
親が条件反射的に更に不機嫌そうな顔をした
のが視界に入った。
「デザイン事務所です」
「へえ、意外。裕弥さんって、そういう方向
の勉強してたっけ？」
「デザイン事務所といっても、営業の仕事
してますから」
「あー、そうなの」
会話が途切れた。父親は黙々と食事を続け
ていた。裕弥は、父親なのに息子の仕事に全
く興味がないのかと思っただけで失望した。父親に
少しも関心をもちつぽ
けな存在に思えた。
かなと視線を上げると、義母が裕弥に目で何
かを訴えていた。なんだろう？、と思っ
て首

た ような瞳をしていた。頭がくらくらした。
義母の姿もかすんで見えた。俺、なにやっ
るんだ。やばい。苦しい。
急いで靴を履いてドアを開けて外に出た裕
弥を義母は追ってきた。
「裕弥さん！」
門に手をかけて、裕弥は一瞬止まった。チ
ラッと振り向くと、すぐ近くまで義母が追っ
てきていた。裕弥は義母から目をそらした。
門にかけた手がぶるぶる震えていた。裕弥は
俯きながら義母と目を合わせないように少
振り向いて、
「良いお年を」
も確認せず、一目散に門から出て走り、実家
から離れた。一秒でも早く遠くに行きたかつ
た。
道、走って最寄駅まで行った。幼い頃、歩いた
見慣れた風景がすべて遠いものに感じ

た。駅に着き、ホームにすべりこんできた電
車に飛び乗った。とにかく早く実家から離れ
たかった。空いている席に座り、窓から見え
る景色を見ないように目を伏せていた。もう
実家につながるこの電車に乗ることは二度と
ないのではないかとすら思っていた。
自分の部屋があるいつもの駅で降り、真っ
直ぐに帰る気にもなれなかつたので、一度入
ったことがある駅前のインターネットカフェ
に入った。手元に置いたコーヒーにもつけ
ず、インターネットをするでもなく、ぼんや
りしていた。
しばらくしてから、思いついて橋先生が個
人で開設しているホームページにアクセスし
てみた。ほのぼのと書いてあったかい橋先
生のイラストが入っているトップページが表
示された。いつも見ている橋先生のイラスト
を見たらし、胸のあたりがぐうっと締め付けら
れるような感じがした。裕弥はBBSSを表示
してみた。新規の書き込みは1つだけだっ

た。橘先生のイラストのファンらしい。
「来年もイラスト、期待してます。頑張っ
てください！」
裕弥はなんとなくキーを叩いた。
「自分が存在している価値ってなんだろう」
と打って送信した。
ぬるくなったコーヒーを一口飲んで、また
しばらくぼーっとしていた。
通路から楽しそうな笑い声が聞こえた。男
女の声が混じっていたので、カップルなのだ
ろう。ちよっぴり「羨ましいな」と思った。
そしてふと現実に戻されたような気持ちにな
った。
目の前のインターネット画面を見つめる。
橘先生のホームページのBBSが表示された。
ままになっただけ。裕弥の書き込みも表示さ
れていた。
「俺、なに書き込んでんだ。こんな書き込
み、荒らしみたいじゃないか。」

